文学のしるべ　建立作品集

公益社団法人福知山市文化協会

1

昭和50年度（1975）

三段池公園

短歌

こゝにして大きく曲る由良川は息を立てつつ朝明けにけり　早川　亮

風化して骨片さえもなき古墳街のざわめきを風がつたえる　上垣　松之助

俳句

寒雀野の一木に声ひらく　細見　烏外

風花や丹波に古き陶の村　村島　雨郎

川柳

自画像を描けば一枚の枯葉　長藤　泰敏

咲ききりし牡丹の緋ゆえ哀しくて　松山　温子

2

昭和51年度（1976）

長安寺公園

短歌

室山にひとひら黄なる雲寄りてゆうべ輝く冬おはる日に　掃部　千歌

姫髪の山ふところに抱かれて薬師如来のみそなはすみ寺　菅野　房乃

俳句

つづけさま鐘がなるなり春霞　根本　菊泉

うららかや石段数えつゝ忘れ　吉田　大江

川柳

なにもしてやれなかった亡母を拾う箸　芦田　菊枝

黄の傘に雨歌わせて子が帰る　塩見　さと

3

昭和52年度（1977）

福知山城跡

短歌

山峡に霧をふくみて吹く風の夕べはさむくなりにけるかな　六車　勇

咲き盛るころのぼり来て城跡の花に思い出つなぎて歩く　日和　初子

俳句

街よりも城跡に早き秋の色　西田　円史

城櫓花雪洞に映えてきし　西本　中江

川柳

さいはての夫婦をおもう花の雨　羽田　国子

子を語る友に女の距離がある　前田　好子

4

昭和53年度（1978）

平和公園

短歌

展けゆく吾が街遥か俯瞰して永久の平和を守る忠魂碑　細見　千代子

戦死せし馬の墓石に手向くると摘みしれんげは束ねて紅し　福田　尭

俳句

秋の蝶忠霊塔の辺を去らず　芦田　三千代

少年兵冥るよ花の日溜りに　芦田　呂甫

川柳

耳を澄ませば軍歌聞える平和墓地　中川　ふみ

鎮魂歌一段ごとを登りつめ　嶋田　ますゑ

5

昭和54年度（1979）

天寧寺

短歌

大きなる蛇のうろこの一かけら唐天竺超え来てここに止まる　雀部　喜太郎

そのかみの七堂伽藍顕たしめて芝生はひろく秋の日のいろ　菅沼　政子

俳句

蓮枯れて雪が近しよ山の寺　土田　祈久男

放生池蛇すみつきて水すまず　井上　六太郎

川柳

夜の露天にのぼれば星となる　二条久保真子

石一つ置いて余生の庭とする　片山　純子

6

昭和55年度（1980）

観音寺

短歌

色深くみ堂彩どる紫陽花に雨ふりきたり藍の流るる　大槻　寿賀野

虫送りの千灯一斉にともされて観音堂まで続く灯の道　大槻　秀子

俳句

行く春を右に左に仁王像　松山　橘香

菩薩出でませ紫陽花の毬つきに　藤田　未捷

川柳

懺悔するこころを夕陽からもらう　足立　玲子

無理のない橋かけ合って姑と嫁　大槻　雅子

7

昭和56年度（1981）

三岳山

短歌

穂芒の揺るる彼方に湧く雲をまとい古里の山と鎮もる　渋谷　計二

雲湧けるふるさとの山に向い佇つ流雛の一世の思いせつなく　上垣　松之助

俳句

雲海の遠嶺に虹の生まれきし　村山　一棹

郭公や桧山杉山青単衣　横岡　たかを

川柳

雲海へ一瞬煩悩消されたり　芦田　幸恵

厳しさと優しさ三岳は母の山　大槻　和子

8

昭和57年度（1982）

長田野工業団地

短歌

新しく産みなしやまぬ長田野のま愛しきまで鉄うつひびき　松原　浩司

それぞれに緑のフェンス巡らせて建ち並びたる工場の群　阪根　まさの

俳句

白炎天上がる工煙透きとおり　高橋　真砂

城址も工業団地も虹の中　杉山　つとむ

川柳

噴水の四季を絵にして建つ団地　池内　邦子

長田野の風青年の意気をもち　芦田　公子

9

昭和58年度（1983）

御霊神社

短歌

競いたる祭り太鼓も納まりてみたま鎮もる小春日の園　田中　愛子

公園の露店に惹かれし幼な日よ奉納太鼓の響きはじめぬ　酒井　典子

俳句

神苑に春めくものの大樹より　植村　枳秋

街騒を容れぬ神苑蝉しぐれ　酒井　典子

川柳

免税と決めて光秀名を残し　福井　汀亭

光秀と踊りの好きな街に住み　土田　泰子

10

昭和59年度（1984）

養泉寺

短歌

一筋の風道なるか揺れ止まぬ萩のこぼせる白き花びら　和田　秀子

まぼろしは黄の蝶となり縺れつつ乱るる萩の白きに紛る　榎原　たか

俳句

仏灯に光るあまたの萩の露　大島　珠水

禅寺のあまたの萩の白が佳し　飯田　佳芳

川柳

慈母観音の笑顔いちにち戴きぬ　瀬川　津磨子

慈悲と愛つつみかくして萩の寺　片山　美代子

11

昭和60年度（1985）

三段池公園

短歌

蝉しぐれ耳に残して科学館の星の夜空を児と翔び廻る　小野山　綾子

池ゆ生るる湿りし風の追いゆきてきまだら蝶を見失いたる　坂東　布美乃

猿山に冷たく時雨きたる夜を小猿は母に寄りそい寝ねむ　藤田　利子

俳句

初蝶のつかず離れず遊歩道　石鍋　裕千

この池をふるさととして通し鴨　宮本　幸子

山水の音昃り初む法師蝉　中井　清

川柳

白鳥を絵にして三段池の四季　さかねひろし

白鳥よ古墳の私語が聴こえるか　飛田　仙花

ふりむけば古墳風に眠りを醒まされる　荻野　美智子

12

昭和61年度（1986）

長安寺

短歌

いく百の樹齢かさねし大銀杏空を支えて揺るがざるなり　井上　さわの

等間隔に置かれし石のまろやかに鐘楼につづくを僧渡ります　上久保　節子

俳句

戸を開き仏にも見す寺紅葉　村上　笑子

石庭の箒目秋日濃かりけり　谷垣　昭子

川柳

噂ばなし心に雨が欲しくなる　谷垣　利子

生きる糧合わす両掌の中にある　塩見　末野

13

昭和62年度（1987）

福知山城公園

短歌

城垣の大石小石語りかけ四百年のすぎゆき伝う　日和　初子

城の井は深いので昼の星の天正の空が映っていた　川口　克己

俳句

灯の入りて花に浮きたつ天守閣　菅沼　まさご

再建の城へ誘ふ道をしへ　伊豆　奈津子

川柳

野火疾るわれに恥辱のある限り　長藤　泰敏

残照にせかされてひく虹の彩　松山　温子

14

昭和63年度（1988）

三段池公園

短歌

昭和の代生きえて国体迎えしとコートに老ら写真撮りあう　片岡　節子

園児らが未来よびかくるかけ声に国体の秋熱くふくらむ　和田　秀子

はるばると来たる選手らこの丘に郷土の誇り高く掲げつ　榎原　たか

俳句

菊日和国体賛歌この丘に　植村　千寿

国体旗靡く秋天城下町　芦田　ひろ子

秋高し音無瀬の火を掲げけり　松山　橘香

川柳

国体のロマンへ目覚める埴輪の眠　審　敏男

技人の胸に残れよ城の町　富田　千之助

炬火走る丹波はふかい霧の国　河村　勉

15

平成元年度（1989）

三岳山の家

短歌

昭和の代生きえて国体迎えしとコートに老ら写真撮りあう　岡巻　登美子

ふるさとの嶺に佇み山の気につつまれて天の光浴びいる　柏　きみよ

俳句

山の影山へ落して夕焼くる　由良　邦雄

雲海の上に田があり威し銃　田辺　たか

川柳

画用紙が狭いと山が怒っている　向山　幽甫

雑草のいのちと今日を競いあう　古田　千代野

16

平成2年度（1990）

観音寺

短歌

紫陽花の藍の濡れいる寺庭に梅雨の晴れ間の光みなぎる　田中　きぬゑ

花の向き定まらずして紫陽花の重き毬玉にしとど露置く　蒲　幸子

俳句

紫陽花に彩配りゆく通り雨　松山　紀子

一山の紫陽花毬を重ねつつ　塩見　柿村

川柳

転生のいのちを観音杉に聴く　楠岡　潤人

いのち尊し紫陽花の露掌にうける　田村　悦子

17

平成3年度（1991）

天寧寺

短歌

周及禅師座らせ給うや放生の池のさ中の大きな蓮の葉　大槻　さく江

み仏のみ声ときかむかすかなる音たて蓮の花ひらく朝　矢野　美恵

俳句

蓮ひらく大日如来の光享け　前崎　三千代

鐘楼の端に月あり茶筅塚　堂北　緋佐子

川柳

ぶらり来て羅漢とあそぶひとり旅　飛田　茂

人ひとり許して命あたためる　産田　佐代子

18

平成4年度（1992）

長田野工業団地

短歌

幾何学模様に空を画せる高圧線工業団地は終夜灯せり　大槻　奈美子

俳句

工場の塀の限りを躑躅咲く　松井　栄子

川柳

ちぎり絵のひとこまに置く兵の跡　大槻　和枝

養泉寺

短歌

乱れ咲く萩のまにまに風生れて刻揺らしいる白のしたたり　植山　友代

俳句

千条に枝垂れし萩を風が梳く　前崎　とし江

川柳

百歳へつづく余生の花暦　足立　耀子

19

平成5年度（1993）

平和公園

短歌

樹々深き公園の鳥となりし霊遊ぶ子ら守り澄む声交わす　小林　玲子

俳句

虫時雨はげし一兵卒の墓　田中　まさゑ

川柳

聖戦と信じて逝きし兵眠る　辻本　きよ子

福知山城

短歌

豊磐井の底ひに涌ける水の音しだくさ茂る奥より聞こゆ　浅野　やい子

俳句

蔀戸を開けて天守へ花の風　足立　志津子

川柳

四季の絵の真ん中におく天守閣　永峯　八重

20

平成6年度（1994）

三段池公園

短歌

科学館のプラネタリウムに見る星座しばし宇宙の人となりいる　柴田　セツ子

俳句

鴨常に視野の内なり遊歩道　塩見　芳子

川柳

鬼となる釘一本が打ち込めず　高階　秀峰

御霊神社

短歌

境内に桔梗の咲ける光秀忌野点の席に拝鈴ひびく　向山　千代子

俳句

光秀を祀りし宮の七五三　駒崎　八重子

川柳

子に灯す愛の火種を吹きつづけ　畑山　喜千坊

21

平成7年度（1995）

三岳山の家

短歌

風渡る三岳嶺に立ち頼光の鬼住む尾根を遠く望めり　柏　きみよ

俳句

雲海へ登校の列下りてゆく　西田　円史

川柳

手のひらに針一筋の道がある　荻野　やよい

長安寺

短歌

紅葉散る寺苑のほとり耳研ぎて聞く水琴の妙なるひびき　小林　三来

俳句

磴登る一歩一歩に紅葉濃し　宮本　美恵子

川柳

運のよいきっかけだった鶴になる　石井　千代江

22

平成8年度（1996）

観音寺

短歌

千日会千の灯りの連なりて隠し世に照る巨き仁王門　大槻　美佐江

俳句

紫陽花の彩を盡くして雨に咲く　冨士原ひさ女

川柳

あじさいにもたれてねむる水子仏　足立　玲子

天寧寺

短歌

亡き夫を恋いつつ来れば三岳嶺の風に騒立つ天寧寺の庭　大槻　あき子

俳句

茶筅塚光りて続く露の道　間島　明美

川柳

山門に煩悩ひとつ解き放つ　荻野　美智子

23

平成9年度（1997）

長田野工業団地

短歌

プラタナスの並木の陰影のバーコードジョギングの朝の工業団地　藤田　光子

俳句

霧に灯の動き工業団地覚む　高藤　波翠

川柳

噴水の真上にこころの駅がある　小林　正登

養泉寺

短歌

人去りしのちを静かに散る萩のはなびら清し夕つ陽のなか　外賀　仁美

俳句

本堂に白萩の風通しけり　西村　滋子

川柳

煩悩とおぼしきあたり風が舞う　樋口　裕花

24

平成10年度（1998）

福知山城

短歌

咲く花にかこまるる日の天守閣春ごとめぐる生きの思い出　牧　とし子

俳句

新涼を空と分かちて天守聳つ　塩見　瑞代

川柳

ライトアップの城も踊りの輪の中に　中村　美壽栄

平和公園

短歌

風に鳴る杉の木立のかこむ園風鎮まればみ霊らの声　奥田　昭子

俳句

草の絮飛ぶしづけさや兵の墓　堂北　緋佐子

川柳

星が降る勇士が冥る平和墓地　藤下　房子

25

平成11年度（1999）

三段池公園

短歌

秋のいろ湛うる池に寄り添える水鳥の抱く風のかがやき　河合　しづ

はぜ楓どうだんつつじそれぞれに夕陽をよせて公園の道　長岡　妙子

俳句

菰巻きて赤松池へ身を反らす　藤田　魯朴

さざ波に寄らず離れずつがい鴨　大槻　琴恵

川柳

野分以後なお賑やかな鴨の池　駒居　とし子

彼岸花古墳の丘を火の海に　長藤　泰敏

26

平成12年度（2000）

御霊神社

短歌

新しき朱塗り舞殿男の子らの明日へ満つる太鼓のひびき　前嵜　弘子

俳句

光秀の宮煌々と夏の月　塩見　芳子

川柳

町興し御霊太鼓にある活気　北村　幸智子

春影稲荷神社

短歌

みやしろの朱の御柱陽に映えて春影稲荷眺望の陵　樽井　町子

俳句

見晴るかす町も変遷宮の秋　神谷　芳子

川柳

わが町の鬼門を守る神の城　片山　純子

27

平成13年度（2001）

長安寺

短歌

黄の扇ふりほどき散る大銀杏目守る幾年里の移りを　矢持　玲子

俳句

千年の大樹の梢磴涼し　大串　忍

川柳

公孫樹に母なるいのち宿らせる　榎原　はるみ

天寧寺

短歌

空を舞う龍を描ける天井画檜の香清しく建つ薬師堂　大槻　さよ子

俳句

石仏に秋の木洩れ日濃かりけり　足立　柳太郎

川柳

佛の灯に愚かな心照らされる　足立　正子

28

平成14年度（2002）

観音寺

短歌

寺庭の万の紫陽花雨にぬれ藍流しつつ吾を染たり　田中　延子

俳句

あじさいの毬で遊ばむ水子たち　奥村　皐月

川柳

あじさいの真実ほとけの声がする　谷口　貞雄

三岳山の家

短歌

山岳嶺の山ふところに抱かれて木の香に満ちし山の家の夏　溝畠　つたえ

俳句

熊よけの鈴をならして修験道　大林　令呼

川柳

雲海に天女も手を振る三岳山　大槻　和子

29

平成15年度（2003）

長田野公園

短歌

噴水の水高だかと入りつ日の光砕きつつ団地くれゆく　井上　久恵

俳句

長田野の森の広さに虫時雨　中村　清孝

川柳

長田野にいのちの燃える朝がくる　飛田　茂

養泉寺

短歌

吹きみちし萩のこぼるる寺坂を上れば微風香をはこびくる　和久　武志

俳句

観音の御手よりこぼる萩の花　前崎　とし江

川柳

萩寺へ萩の輪廻に逢いに行く　谷垣　利子

30

平成16年度（2004）

福知山城

短歌

水満ちし豊磐の井を思いては向かう城址へ咲く曼珠沙華　大槻　清子

俳句

城の井の闇を照らして望の月　堂北　緋佐子

川柳

天守閣見えて車窓の旅終わる　大槻　閑枝

平和墓地

短歌

幾星霜めぐる彼岸会もののふのみ霊寧かれ流るる読経　外賀　仁美

俳句

花吹雪隈無く浴びて兵の墓　下村　冴子

川柳

遥かはるかのこだまが還る平和墓地　楠岡　潤人

31

平成17年度（2005）

三段池公園

短歌

青深き水に真夏の陽がはじけ三段池はひかりの器　小野山　綾子

幾年を育ちし赤松公園の池より吹き上ぐる風の声聞く　田中　久枝

俳句

百幹の松梳く風も秋の声　鹿嶋　玉野

古墳より望む城下の豊の秋　宮本　幸子

川柳

そっと覗けば鴨の家族で和む池　依藤　茂子

あずまやにすうっと座る風がある　足立　美穂子

32

平成18年度（2006）

御霊神社

短歌
移りゆく時代を越えて街人の集うを見守る御霊神社　矢持　玲子

俳句
舞殿に風とあそべる秋の蝶　浅田　忠彦

川柳
光秀を讃え踊りの輪が弾む　富田　千之助

醍醐寺

短歌
移りゆく時忘れさせみ仏の霊を抱きて聳ゆる巨杉　小田　いづみ

俳句
山門を潜れば花の浄土なり　田中　絢子

川柳
石に掛け天下国家を思案する　熊谷　辰馬

33

平成19年度（2007）

長安寺

短歌
しんしんと大き紅葉にふりそそぎ光を揺らす寺庭の夕日　吉田　克子

俳句
蝉しぐれ城主の墓は寂として　池田　和子

川柳
大文字紅葉の寺を懐に　大槻　神之助

天寧寺

短歌
秋光をうけて静もる薬師堂いろ鮮やかな瑠璃光の文字　足立　満子

俳句
蓮巻葉ほどける法の風を享け　塩見　瑞代

川柳
灯を点す蓮のうてなにある浄土　藤下　房子

34

平成20年度（2008）

観音寺

短歌

観音寺石仏めぐればあじさいの青き光の我を染めたり　田中　敏子

俳句

一山の四葩に遊ぶわらべ仏　宮本　美恵子

川柳

あじさいに水子も染まる観音寺　大槻　和江

三岳山の家

短歌

静寂を不意にやぶりて若きらの歌声あがる三岳山の家　坂根　まきの

俳句

朝霧や修験の杖に鈴つけて　森本　路石

川柳

雲海の彼方は弥陀の浄土かも　藤原　美代子

35

平成21年度（2009）

長田野公園

短歌

長田野公園散歩の人ら行き交えばブロンズ像にさす光隠し　畑　慶子

俳句

未来へとつなぐ長田野揚雲雀　大林　令呼

川柳

長田野に夢と希望の陽が昇る　津江　美津子

洞玄寺

短歌

きざはしを登ればぼうたん彩と香の満ちる洞玄寺人のたえざり　大槻　恭子

俳句

繚乱の牡丹に鐘のひびきけり　伊豆　奈津子

川柳

百段を登り菩薩の手に触れる　田中　鈴子

36

平成22年度（2010）

福知山城

短歌

秋の日にそびえる天守カンバスに完成近し福知山城　塩見　操

俳句

城垣にひめたる史跡桔梗咲く　竹下　淑子

川柳

変わりゆく街を見下ろす天守閣　今田　さかゑ

養泉寺

短歌

天籟につつまれ鎮もる養泉寺萩ゆれやまぬ夕映えの中　石鍋　照代

俳句

法の風白く地を染むこぼれ萩　公手　幸子

川柳

一枝の萩にも慈悲の風匂う　飛田　きよ子

37

平成23年度（2011）

三段池公園

短歌

あの日見し「みわとうり坊」散歩する影を追いつつ秋を吹く風　田中　延子

三段池に万のランナー健脚を競いて集う福知山マラソン　高橋　明美

俳句

さざ波の池を照らして望の月　堂北　緋佐子

親子連れ研がへしの秋日和　芦田　伊津子

川柳

松影も心の綾も写す池　荒田　直

水澄んで池の水面に心棲む　田中　笛奈

38

平成24年度（2012）

醍醐寺

短歌
丹波路の果てる山路に醍醐寺の紅葉の中になお紅葉あり　大嶋　正和

俳句
曝涼や古文書多き山の寺　荒木　千恵子

川柳
山門に立てば御法の風を受け　木戸　利枝

御霊神社

短歌
光秀をしのぶ社や秋祭り御霊太鼓は街を揺るがす　小林　鈴子

俳句
白桔梗光秀称え凛と咲く　奥村　皐月

川柳
光秀と平安祈る御霊の社　田中　百合子

39

平成25年度（2013）

長安寺

短歌
深々ともみじ青葉に鎮もれる寺苑歩めばみ仏に会う　大槻　淳子

俳句
木洩れ日も涼しさとなる古刹かな　雲川　澪子

川柳
煩悩を薬師如来に預け置く　吉見　和江

天寧寺

短歌
花満ちて山寺座してをりしとき弁当へ散る一片の花　杉森　大介

俳句
蓮池の大葉を揺らす弥陀の風　谷村　和子

川柳
羅漢図に心洗わる蝉しぐれ　秋山　恵美子

40

平成26年度（2014）

観音寺

短歌　仁王像に迎えられ参る観音寺往時を思いて寺苑を歩む　井上　志げ乃

俳句　臘梅に庭ひとめぐりふためぐり　植村　太加成

川柳　浄土へと水子供養の花の寺　吉良　郁江

三岳山の家

短歌　同窓会に集いて賞でし雲海の想い出はるか山の家の秋　遠山　真智子

俳句　コスモスの揺れて明るき山の風　横岡　孝男

川柳　雲海に懐かれ祈りを深くする　藤下　房子

41

平成27年度（2015）

福知山城

短歌　古の息づき聞こゆる福知山城野点の席に一会の桔梗　外賀　仁美

俳句　天高し四方見渡す天守閣　太田　笑美子

川柳　城壁の光と陰を知る桔梗　永峯　八重

洞玄寺

短歌　山門をくぐれば穏しき光まとい菩薩のならぶ洞玄寺の庭　田中　淑子

俳句　新緑やたをやかに立つ観世音　塩見　瑞代

川柳　菩提寺の牡丹御仏の声がする　田中　百合子

42

平成28年度（2016）

三段池公園

短歌

三段池の立つさざ波に誘われ師を偲びつつ歌碑へと歩む　阪根　てる野

子と歩む三段池の散歩道ほろほろ揺るる早咲きの萩　樋口　やよい

俳句

新涼や松百幹の匂ひたつ　四方　和美

天高し広場にこだます子等の声　大槻　京女

川柳

親子鴨平和願ってなごむ池　桐村　久美子

山野草小道抜ければ猿の園　足立　佳子

43

平成29年度（2017）

御霊神社

短歌

光秀公祀られ在す御霊神社祭りの果てて鎮もる宮居　田中　延子

俳句

光秀を偲ぶ影濃し秋祭　大林　令呼

川柳

残照を彩る御霊に弾む声　近藤　真由美

養泉寺

短歌

萩寺の萩の茂りに咲く花の白の零れて御仏の手に　林田　智里

俳句

一村に峰地寺の風萩の風　田淵　桂子

川柳

養泉寺こころ静まる萩の寺　足立　順子

44

平成30年度（2018）

長安寺

短歌　薬師堂仏を見守る天井の龍の眼光深き彫り跡　大谷　勇

俳句　石庭の渦となりけり散紅葉　芦田　伊津子

川柳　鐘の音に誘われ逢えるかも紅葉　藤原　美代子

醍醐寺

短歌　元旦の雪の醍醐照る朝日煌めきており年月の翳　岩滝　徹

俳句　千年杉ひねもす読経の法師蝉　塩見　むつみ

川柳　仏心を薬師如来に求めゆ　吉良　啓子

45

令和元年度（2019）

観音寺

短歌　拝みて我に返らん仁王の眼万の紫陽花誇る観音寺　田中　久枝

俳句　手を引かれゆく紫陽花の仏径　塩見　八重子

川柳　あじさいの彩響き合う観音寺　田中　一郎

46

令和2年度（2020）

福知山城

短歌　石ぐみのふりて鎮める城門の青葉に映ゆる福知山城　松山　加代子

俳句　秋天を蹴り上げてゐし城の鯱　藤谷　方子

川柳　古に心引き込む深き井戸　横川　和子

47

令和3年度（2021）

天寧寺

短歌
（該当なし）

俳句
方丈に丸二の幕や雲の峰　後藤　一郎

川柳
四季の彩深く漂う薬師堂　藤田　富子

48

令和4年度（2022）

三段池公園

短歌
春桜夏は水鳥秋紅葉冬雪踏みて湖畔の夢よ　山口　秀樹

俳句
秋の空マラソン青年風を切る　西村　白杼

川柳
清涼の湖面ころがる笑みの声　熊谷　英子

49

令和5年度（2023）

洞玄寺

短歌
崩れ散る白いぼうたん魂のもどりゆく場所菩提寺の庭　田中　延子

俳句
身に入むやゆつくり回す摩尼車　田中　富子

川柳
昭和の日遊び場だったぼたん寺　根垣　万里子

50

令和6年度（2024）

御霊神社

短歌
光秀の御霊眠れるごりょうさんお頼みしますいついつまでも　樋口　やよい

俳句
光秀をたたへ丹波の踊り笠　水巻　令子

川柳
水色桔梗咲いて御霊に踊りの輪　長田　和子